

第二章 奈良町の産業

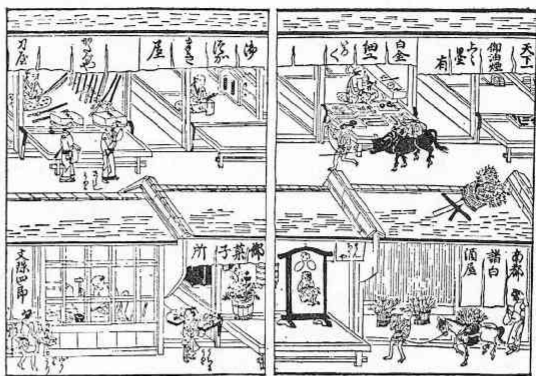
第一節 産業の町

奈良晒と 中世の奈良は、寺社支配のもと、商工業に根を下ろした堅実なまちとして発展してきたが、江戸時代を迎えて、産業都市として繁栄をみせた。その中心となったのは、奈良晒であった。延享五年（二七六）の『奈良曝布古今俚諺集』の序で、著者村井古道（奈良の医師・文人 一六八一—一七四九）は、こう書いている。

慶長年前までは、奈良の町家今のごとき町並に非ず、工商家居奈良七郷とて、各農民或は興福寺、元興寺、東大寺、春日社の奴婢、被官、又は寺侍、役人等の居任にして、工商の家は、甲冑細工人、奈良刀、或は酒家、墨師等多くして、生布、晒布、青苧、紵の商家は、希々ならではなかりしと也（中略）兎角当代流布の曝布（奈良晒）は、慶長寛永年中より織屋商売人さかんにたりし也

慶長（一五六—一六五）以後、奈良晒が発展、それによって町の姿が大きく変貌したというのである。奈良晒というのは、後に詳しく述べるように、奈良を中心に生産された麻の織物のことで、村井古道のいう「生布、晒布、青苧、紵の商家」また「織屋商売人」の背後に、多数の生産者がいたわけである。貞享三年（一六六）の史料に「当町中十ノ物九ツハ布一色ニ而渡世仕候」とある。奈良晒は、「南都随一」の産業として繁栄、奈良の歴史に「産業都市奈良」とも称すべき時代を生み出したのである。

とはいえ、奈良晒だけが産業だったわけではない。『奈良曝布古今俚諺集』が、慶長以前に多かったという甲冑



『南都名所集』(延宝3年序)

・奈良刀などの武具や酒・墨なども、当時世に聞こえた特産品であった。これら中世以来の伝統産業もまた、産業都市奈良に色どりを添えていたのである。

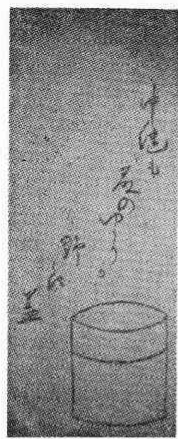
南都の名産

いま、正保二年(西暦)の『毛吹草』によって、十七世紀中葉の奈良の「古今ノ名物」をみると、つぎのようにさま

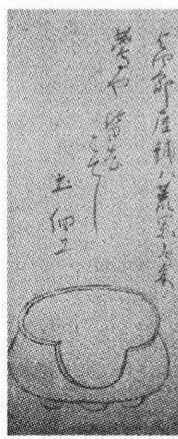
ざまのものがあげられている。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|--------|-----|-------|-----|--------|--------|-------------|-------|-----------|------|--------|---------|---------|--------|-------------|-------|----------------|------------|--------|------------|-----|----|------|----|---|----|
| 細美 | ササメ | 瀑 | サラン | 平布 | ヒラスク | 縮 | チレミ | 鴛布 | シマヌク | 畦布 | ウネヌ | 衣地 | カチヤウヂ | 蚊帳地 | グシク | 具足 | アブミ | 鐙 | ツクリロクウ | 作緑青 | コユミ | 曆 | クチバク | 扣薄 | | |
| 根本 | ニホン | 油煙墨 | ユエンボク | 色墨 | イロボク | 中継 | ナカヅメ | 奈良塗 | ナラヌリ | 土風爐 | ツフケ | 塗桶 | ヌリバケ | 瓦燈 | カハトウ | 灰ボウロク | 早鍋 | ワナベ | 付硫 | ツケ | 溜 | ツグ | 溜 | 溜 | 溜 | |
| 糖饅頭 | アメマンダウ | 飯館 | イヒビシ | 僧坊酒 | ソウボウザケ | 東大寺蘭奢待 | トウダイシランシヤタイ | 興福寺銀杏 | キョフクシギンアン | 春日山櫟 | カスガイナキ | 祢官屋敷木練柿 | ネギヤシキナキ | 西大寺豊心丹 | サイダイシノホウシタン | 法華寺作土 | ホウワジノツクリツチノコイヌ | 小犬比丘尼ノワザナリ | 薬師寺造花 | ヤクシジノツクリバナ | 年中 | 中 | 拵 | 置 | テ | 二月 |

茶の茶入れ、土風炉は茶の湯で用いる土製の炉、灰ボウロクは風炉の底にたまった灰を取り入れる炮烙(ほうらく)のことで、

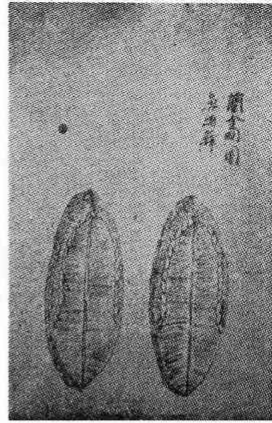


中継
(『南都名産文集』)



土風炉
(『南都名産文集』)

青はロクショウで堂舎などの塗料、扣薄は金銀の箔のことである。中継は抹



金剛
 (『南都名産文集』)

僧坊酒は奈良酒のことだが、前代多く寺院でつくられていたためにこう呼ばれたのである。東大寺蘭奢待は、正倉院の伽羅ハチラの香木、西大寺豊心丹は、西大寺でつくられた何にでもきくという薬の名前である。他については説明するまでもないであろう。

やや時代を下って、元禄十五年(一七〇〇)の作とみられる『南都名所記』は、その末尾に「ならのめいぶつ」として

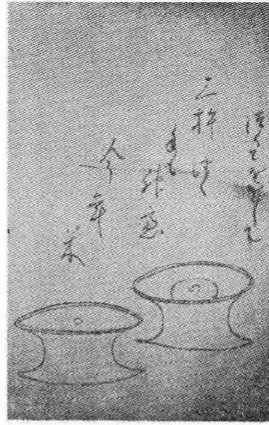
- 一 ぐそく 一 さらし 一 ゆえんすみ 一 さけ 一 もんじゅ四郎小がたな 一 まんぢう 一 西大寺ほうしんたん
- 一 うちば 一 ほつけ寺つちいぬ

をあげ、「右の外めいぶつおほし」としているが、十年後の正徳三年(一七三三)、村井古道の書いた俳文集『南都名産文集』は、つぎの四一品目におよぶ名産について述べている。

- 油煙墨 晒布 僧坊酒 饅頭 団扇 奈良刀 文殊小刀 法論味噌 鮭鮎 甲冑 奈良漬 膠 木練柿 滑飴糖 簿
- 奈良緑青 蘭草履并金蓮草履 糸鞋 中継 大鼓 奈良茶 飯酢 白牡丹 春日砥 春日盆 櫟 梵天瓜 奈良曆 奈良台



奈良台
 (『南都名産文集』)



手 坏
 (『南都名産文集』)



元興寺籠
 (『南都名産文集』)

鎌 布機 石刈石井熟石 元興寺籠 奈良鐘 水屋納豆 坏手
 狂言袴 豊心丹 南都風炉 法華寺犬

この中には、謡を意味する謡や白牡丹など物産にあたらぬものがあるし、「かすかになるそ佗しきや」とする春日砥や、「惜哉今はなし」という奈良鐘（青銅ないし真鍮製の茶釜）も含まれている。元興寺籠（元興寺町でつくられた花生の籠）も、当時存在したかどうか疑わしい。また、餡餅は春日社にお供えする油せんべい、糸鞋は絹糸を編んでつくった舞楽用のくつ、水屋納豆は祢宜ねぎの家に伝えられた納豆、坏手つきては春日社で神饌を盛るのに用いた土器というふうに、いずれも春日社関係の特殊なものである。簿は薄の誤りであろうか『毛吹草』の叩薄のこと、奈良台というのは、島台を意味する。

この『南都名産文集』の著者古道は、十四年後の享保十二年（一七三〇）に著した『奈良名所記』では、その序にあたるところで、「元来神社仏閣名所旧跡すくなからず、名産の品々も又数多にして就中晒布を以て最上の産業となす、其訳ついでの名物略ここに記す」として、

晒布 刀 刺刀 酒 油煙墨 饅頭 団扇 鑑 兜 法論味噌 膠



豊心丹・法華寺土犬
 (『大日本名産図会』)

草履 土風炉西京風 大鼓皮 木練柿 滑粉 香物奈良漬 嶋台奈良台 鎌 曆 緑青 豊心丹 法華寺作犬 糸鞋 白牡丹 雲茸
 の名をあげ、「此外数種ありといへとも、普く人の知れる類ひを書記し侍る」と書いている。さきの『南都名産文集』と比べるとだいぶん減っているが、江戸中期の奈良の名産といえば、およそこんなところであったであろう。
 南都の土産どさん
 古道とほぼ同時代に、全国的な視野で書かれた書物では、どうなっているだろうか。まず、正徳二年(一七三三)に出た図説百科事典『和漢三才図会』では、「大和土産」の項につきのものが掲げられている。

- 油煙墨アツクミ(奈良)
- 曝布さらしの(同)
- 团扇うちわ(同)
- 諸白酒もろけさけ(同)
- 塗桶ぬりかじ(同)
- 土風炉つるふろ(同)
- 豊心丹ほうしんたん(丸葉出ニス於西大寺ヨリ)
- 銀杏ぎんあん(興福寺)
- 櫟かし(春日)
- 鹿か(同)

「製造」として
 ついで、享保二十一年(一七四六)の『日本輿地通志』畿内部大和国(『大和志』と称す)は、添上郡の「土産」のうち

- 曆本 甲冑 刀劍 蹈鏡アツクミ 漂布サラシ 墨 团扇うちわ 酒 糟瓜ナラツケ已上皆供ニ御用一名關四方一
- 饅頭 藺履 木綿織タビ 法論豆醬ホロミン 豉油イコロ 豆腐豆已上南都
- 泥ツチ

をあげ、添下郡(奈良市域外は省略)では、
 豊心丹ほうしんたん西大寺出 漂布サラシ足田村出 陶壺カハ菅原村出 博炉ハク世二称ニ奈長風炉一 土産どさん俱ニ九条村出
 をあげている。

また、安永七年(一七八六)の「和州南都之図」には、「土産」として、

- 奈良晒 油煙墨(扇脱カ) 团 奈良刀 南都諸白 霰さけ 法論味噌 足袋

奈良草履

をあげ、「其外多しといへとも畧之、今ここに者名の高きをあぐるのみ」と記している。そして、幕末の嘉永二年（一八五〇）の「大和国細見図」が掲げる「國中名産略記」では、

晒布 団扇 大和柿 酒露酒其 墨 春日盆 土器春日神供 具足 十文字稽古槍 練草鞞 刀筆 春日藤綴織モジ 石墨
禹餘糧俗ニソソ 石燈籠 木燈籠 鼓革 土風炉 練鹿 奈良人形 鹿角細工 換掌奈良八景ヲ指ス 居伝坊春日祭事ニ 火打焼
糟漬瓜俗ニ奈良 燂実 春日野味噌 蕨餅 金剛草履 足袋 以上奈良 土偶大法花寺 豊心丹西大寺
となつてゐる。

産業の町から 観光の町へ

以上若干の書物や案内図を拾つてみたところでは、近世の奈良には、ずいぶん多様な物産があつたこと、きになつた『南都名産文集』のように、白牡丹や諷など、物産に類しないものを取りあげたりしている場合もある。しかし、全国に聞こえたものとして共通にみられるのは、奈良晒であり、酒であり、墨・武具・団扇である。

このうち団扇は、とりたててるほどのものではなかつたから、近世奈良の産業といえ、奈良晒は筆頭に酒・墨・武具といふことになるであらう。じつ、貞享四年（一六八七）の『奈良曝』に名前があがっている「諸職名匠」のうち、奈良晒関係では晒問屋三三軒をはじめ、業者一一〇軒（他に曝教合三一人）、布仲買六、七〇〇人、具足・刀剣の鍛冶や商人など武具関係者一一六人、酒屋二五軒、墨屋九軒を数え、このころの奈良が、奈良晒・武具・酒・墨の町だつたことがうかがえる（第三章第三節「町家と職業」参照）。

しかしながら、酒や武具は、早い時期から衰退に赴き、奈良晒もまた中期以降に衰えていく。墨だけはわずかに盛況を維持したものの、産業都市奈良の支柱だつた奈良晒が衰退しては、町は沈滞をまぬかれなかつた。奈

良は産業都市としての性格を失い、観光の町へとしだいにその姿を変えていき、明治初年には「近年晒大ニ衰ヘ筆墨モ従前ト霄壤ス（筆者注、天と地の開きがある）」………唯恃ム所ハ春日大仏ノ諸勝ニテ市中之ニヨリテ拳火（筆者注、火計をたてる）モノ幾何ナルヲ知ラス（「日新記聞」第十号）といわれるにいたる。文化十年（一八三三）の



練鹿・油煙墨・法論味噌
 『大日本名産図会』

第二節 奈良晒

『大日本名産図会』に奈良人形・井伝坊菓子・練鹿・なら茶めし、奈良漬があらわれ、さきに掲げた四半世紀後の「大和国細見図」に、奈良人形・練鹿・鹿角細工のほか、火打焼・蕨餅などといわゆる土産物が登場してくるのは、そのあらわれであろう。産業の町から観光の町へ——その転換の画期は、大仏殿の再興が成って落慶法会の営まれる十八世紀の初頭とみてよいであろう。

麻の最上 奈良晒は、近世奈良を中心に織出された麻織物のことである。「帷子、三都士民ともに式正にはかたびら」
 奈良晒 奈良晒麻布の定紋付を用ふ（第十三篇）といわれ（「近世風俗志」）、「東武御公用御納戸晒布」はじめ「諸大名様方御旗本様方御上下地御帷子地御幕地」に用いられたとあるように（田村氏旧蔵文書、奈良教育大所蔵）、武士や富裕な町人の袴などの礼服用ないし帷子の衣料として用いられた。

奈良晒は『和漢三才図会』に「按ズルニ曝布、和州奈良ヨリ出ル、布之上品也、羽州最上ノ苧麻（苧麻）ヲ緝キテ布ト為ス、細緻ナルコト絹ノ如シ、之ヲ煮テ春晒スコト数回、潔白雪ノ如シ」（原漢文とあり、『万金産業袋』）